

雪国の民家

早津剛展

会期 平成8年2月21日～3月31日(前期3月9日(出)まで、後期3月10日(日)から)

執拗なまでに「雪国の民家」カヤブキの民家「だけにこだわり続けてきた早津剛氏が、このたび、当町に残るカヤブキの家「緒立の家」(緒立の常民文化史料館)を描かれたことを契機に、展覧会や講演会を開催して、広く町内外に紹介し、町の芸術文化の振興を図ろうと、会場の雪梁舎美術館及び新潟日報社の共催を得て、長期間の展覧会を開催することになりました。

執拗なまでに「雪国の民家」だけを

描き続ける早津剛氏

長い長い冬のあいだ、豪雪に埋もれて、じっと耐えているかのような雪国の民家。二メートル、三メートルと降り積もった雪は、まるでなだれのように家々に襲いかかり、これを見つめると、メルヘンの世界を演出する美しい雪も、時にはそこ雪国に住む人びとの暮らしにとっては、生死にかかわる過酷な現実として重くのしかかって来る。

こうして過酷な自然の中で、ひっそりと息づいて来たカヤブキの民家も、時代の変遷の波に押し流され、開発の名のもとに、次々と取り壊され、あるいは長い年月と自然の風雪に堪えかねて廃屋となり、加速度的にその姿を消しつつある。

早くからこのことに着目し、深く憂う画家・早津剛氏は、消えゆくこれらの雪国の民家の四季折々の姿を描き続けて来た。それは、アトリエの中ではなく、正に降りしきる雪の中で、また、照りつける真夏の太陽の下で直接にキャンパスに向うという厳しい現場主義、あくまでも現実として

ある。卓抜な写実と迫力が織りなす重厚な早津剛氏の絵画によって、今、豪雪のみならず、文明の波に没しようとしているカヤブキの民家の一棟ひとむねが、着実に甦りつつある。

「緒立の家」完成を契機に展覧会などを開催

このたび町では、早津氏の筆で、「緒立の家」(常民文化史料館、五十号油絵)が描かれたことを契機に(財)美術育成財団雪梁舎並びに新潟日報社と共催で「雪国の民家 早津剛展」を開催することとなりました。

油絵五十点、水墨画五十点の合計百点を展示いたします。この展覧会の中で「緒立の家」も初披露されることになっています。

- ◎雪国の民家 早津剛展
- 会期 二月二十一日(水)～三月三十一日(日)(途中作品入替え) 午前九時三十分～午後五時 休館日：毎週月曜日
- 会場 雪梁舎美術館(黒埼町山田四五一、新潟ふるさと村斜向い)
- ◎早津剛氏講演会
- 日時 三月十日(日) 午後一時三十分～
- 会場 北部地区公民館講堂 団教育委員会社会教育課(☎三七七―三二〇一、内線二三三)

取材するなど、油彩、水墨を自由に駆使して阿修羅を思わすほどの行動である。それだけに芯は堅くお国柄の律気一徹そのまま、観念的な発想や、単なる小手先の美しさを避けるというよりも、むしろ軽蔑して挑戦しているようにみえる。都会に集中しがちな画人生活を選ばずに、越後小出の丘の上に画室を構え、わが道をゆくといった生活態度は、早津君らしい清々しい生き方である。消えて行く農山村を愛情深く描く、担い手の一人であろう」と、早津氏を評している。



「緒立の家」(常民文化史料館50号)

早津剛 略歴

一八三八年 新潟県南魚沼郡六日町に生まれる
一九六〇年 独立展初入選
一九六一年 新潟大学教育学部芸術科卒業
現在 無所属、新潟県立小千谷西高等学校教諭

〈主な個展〉

一九六六年 銀座模写廊 を皮切りに
一九七五年 新宿・伊勢丹本館美術画廊 「雪国の民家を描く」以後七回
一九八三年 新潟市・画廊紗衣以後三回
一九九五年 新潟市・新潟伊勢丹アートホール「四季・雪国の民家 早津剛展」など毎年開催

〈主な画集〉

『水墨 雪国の民家』 一九七八年 新潟日報事業社
『雪国の民家 冬・春・夏・秋・水墨画』 一九八四年 恒文社
『水墨画・大和古寺』全五札 一九八六年 恒文社
『四季 雪国の民家』 一九九五年 新潟日報事業社 など多数

〈ギャラリー〉

早津ギャラリー 開設一九八七年 新潟県北魚沼郡小出町青島一五〇―一一六